

聖書に学ぶ

— 信じること，疑うこと —

雨 宮 慧

信じること，疑うこと，ということでお話しさせていただきます。普通、信じるということと、疑うということは、水と油のようなものと考えます。しかし聖書では、もちろん水と油のようなものと表現する箇所が多いけれども、それだけではないと思います。

信じるということの中に疑うということがありえるし、疑うということの中に信じるということがありえる、ということです。ではそれは、どのようなとき可能なのか、それをお話ししたいと思います。

I 「信じる」ということ

a アブラムの歩みの最初（創世記 12 章 1～4 節）

まず旧約聖書から、アブラハムのお話をさせていただきます。聖書が考える「信じる」とはなにか、ということをお話します。

アブラハムの登場は、系図を別とすると、アブラハムがまだアブラムと呼ばれていた頃の出来事を語る創世記 12 章が最初です。ご存じだと思いますが、創世記 17 章で、アブラハムと改名することになりますから、創世記 12 章の段階では、まだアブラムと呼ばれていました。確かに創世記 11 章の系図にアブラムという名前が出ていますが、系図ですから、物語に登場したわけではありません。物語の登場人物として姿を現すのは創世記 12 章からです。創世記 12 章 1 節から読んでみましょう。新共同訳では、

1 主はアブラムに言われた。

「あなたは生まれ故郷

父の家を離れて

わたしが示す地に行きなさい。

2 わたしはあなたを大いなる国民にし

あなたを祝福し、あなたの名を高める

祝福の源となるように。

3 あなたを祝福する人をわたしは祝福し

あなたを呪う者をわたしは呪う。地上の氏族はすべて

あなたによって祝福に入る。」

4 アブラムは、主の言葉に従って旅立った。ロトも共に行った。

(新共同訳)

と訳されています。旧約聖書の原文はヘブライ語で書かれていますが、ヘブライ語の語順をそのままに日本語に置き換えた訳(逐語訳)を作ってみました(1節だけですが)。

1 そして YHWH は アブラムに向けて 言った

「行きなさい あなたのために

あなたの地から

あなたの親族から

あなたの父の家から

私があなたに示す地に向けて。

逐語訳は「そして YHWH は」で始まっています。この「YHWH」は日本語訳では「主」と訳されています。この語は文脈からみて、イスラエルの神の呼び名であるのは明らかですが、紀元前六世紀頃からこの語の発音を避けて、アドナーイと読み替えていました。アドナーイは「主人」を意味するヘブライ語ですから、邦訳では「主」と訳しています。多くの学者は、YHWH がアドナーイと呼び変えられる以前には、ヤハヴェと発音されていたと推測しています。

逐語訳の三行目と四行目に「あなたの地から あなたの親族から」と

ありますが、新共同訳は二つの句を合わせて、「生まれ故郷」と訳していますが、そのまま訳したほうがよいと思います。なぜかと言うと、「あなたの地から あなたの親族から あなたの父の家から」と、意味領域が次第に狭くなる言葉を使っているからです。「地」と言えば、アブラムが属する親族以外の人々も生活していますから「地」という表現はこの三つの表現のうちで最も広い概念です。しかし、二番目では「あなたの親族」に絞り込んでいます。最後の「父の家」ですが、当時のイスラエルは大家族制をとっており、三世代か四世代が一つの家族として暮らしていました。これを「父の家」と呼びました。ですから「父の家」は当時の社会構造の中で最小単位になります。そうすると、「あなたの地」から始まり、「あなたの父の家」へと狭められています。離れる場所を三度も言い換え、しかも広い概念から最小概念へと絞り込んだのは、離れるべき場所を強調するためでしょう。

しかし、なぜ離れるべき場所をこれほどまで強調したのでしょうか。人が誰かに「どこそこへ行きなさい」と指示するとき、離れるべき場所について説明することはなく、むしろ、行くべき場所について詳しく説明するのが普通です。ところが、主なる神はアブラムに、「あなたの地から、あなたの親族から、あなたの父の家から」離れてというように、離れるべき場所を強調しました。しかし、行くべき場所については、「私があなたに示す地」としか述べていません。「私があなたに示す地に行きなさい」と言われたら、最初の一步を左に踏み出したらよいのか、右に踏み出したらよいのか、それすら分かりません。非常にあいまいな言葉が使われています。これは奇妙なことです。

このような奇妙さは何か特別な意図があるからでしょう。それを知るために、11章以前に注目したいと思います。創世記の11章までは、イスラエルという民に限定された物語ではなくて、このイスラエル以外の、いわばすべての民族に適用できる原初の物語として語られています。

創世記1章から11章までをたどってみると、1～2章の二つの創造物語のあと、3章の木の实を食べる話、そして4章の弟を殺す話、そして6～9章の洪水の話と続き、最後に11章1節から9節までのバベルの塔の物語になります。この一連の物語群の間には、5章のアダムからノアまでの系図、そして10章のノアの子孫の系図、最後に11章10節以下の

セムの系図とテラの系図が挟み込まれています。最後のテラの系図にアブラムの名がでできます。しかし、系図ですから、人名の羅列であって、物語が語られることはなく、物語と物語をつなぎ合わせるためにおかれているのだと思います。ですから、これらの系図を無視すると、創世記1～11章は創造の物語と、創造の秩序を破壊する人間の罪の物語と言えます。6～9章の洪水の物語は「主は、地上に人の悪が増し、常に悪いことばかりを心に思い計っているのをご覧になって、地上に人を造ったことを後悔し、心を痛められた」で始まっていますから、洪水物語も人の悪を前提にしています。ですから、原初史全体のテーマは、創造の物語と、創造の秩序を破壊する人間の罪にあります。

ところで、人間に最も身近な共同体と言えば、父の家であり、親族であり、自分が生まれ育った土地です。この地縁とか血縁が、人間が自然に形成する共同体の基盤となります。しかし、神がアブラムに与えた指示は、この自然的な共同体から離れよ、ということでした。神はなぜ自然的共同体からの離脱を求めたのでしょうか。この共同体は、原初史が示すように、創造の秩序の破壊へと向かう傾向があるからです。ですから、現在、パレスチナに存在するイスラエルという国が何を主張するかは別として、聖書が考えるイスラエルとは、地縁とか血縁に基づく自然的な共同体ではないのです。ではどのような共同体なのでしょう。12章の1節の最後の行に「わたしが示す地に行きなさい」とあります。この言葉の意味は、神を導き手として歩きなさい、ということですから、神を導き手とする共同体こそ、聖書が述べるイスラエルなのです。

アブラムは17章でアブラハムと改名しますが、アブラハムの死は25章7～11節に述べられていますから、アブラム、そしてアブラハムの物語は、12章で始まり、25章で終わっています。この物語には頂点が二つあると言えます。一つは15章であり、もう一つは22章の一人息子、イサクの奉献です。今日のテーマのひとつ「信じる」を考えるために大事なのは、15章6節「アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた」ですが、まずはそこに至るまでのアブラムの歩みをたどります。しかし、その前に、この歩みの理解に必要な、もう一つの前提を確認しておきます。それは12章の2節に「私はあなたを大いなる国民にし」とあることです。アブラムを「大いなる国民にする」のですから、子孫に

恵まれるということです。しかし、アブラムはすでに 75 歳になっていますが、子供がひとりもいませんから、神の言葉に従って、ハランを出立したのは、子供への期待もあったからに違いありません。ともかく、アブラムはハランを発って、南へと下ってゆきました。

b 飢饉が暴き出した人間の現実（創世記 12 章 10～20 節）

ハランから南下したアブラムは、カナン地方に入り、シケムからベテル、さらに下ってアイへと足を伸ばしますが、どの町でも主の祭壇を築き、主の御名を呼んでいます。こうして、ネゲブ地方にまで入ったとき、飢饉に襲われます。ネゲブ地方はすでに荒野と呼べる地方ですから、ちょっとした干ばつでも、飢饉になってしまいます。創世記 12 章 10 節以下を読んでみましょう。

10 その地方に飢饉があった。アブラムは、その地方の飢饉がひどかったので、エジプトに下り、そこに滞在することにした。

エジプトにはナイル川がありますから、少々の干ばつは問題にならない豊かな地方です。ですからパレスチナの人たちは、飢饉がひどくなると、エジプトに行って、命をつなぎました。アブラムもエジプトに避難することにしました。11 節以下です。

11 エジプトに入ろうとしたとき、妻サライに言った。「あなたが美しいのを、わたしはよく知っている。12 エジプト人があなたを見たら、『この女はあの男の妻だ』と言って、わたしを殺し、あなたを生かしておくにちがいない。13 どうか、わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり、あなたのお陰で命も助かるだろう。」

アブラムが不安に思うのはごくごく自然です。当時は国際社会といった意識が現在ほどには育ってはいないからです。しかし、13 節の「そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり」での「幸い」とは、何を指しているのでしょうか。そのあとに「あなたのお陰で命も助かるだろ

う」とありますから、命が助かることだと言えなくもありませんが、14節以下を読んでみましょう。

14 アブラムがエジプトに入ると、エジプト人はサライを見て、大変美しいと思った。15 ファラオの家臣たちも彼女を見て、ファラオに彼女のことを褒めた、サライはファラオの宮廷に召し入れられた。16 アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ、ろば、男女の奴隸、雌ろば、らくだなどを与えられた。

16 節に「アブラムも彼女のゆえに幸いを受け、羊の群れ、牛の群れ…」とありますが、ここでの「幸い」は13節「わたしはあなたのゆえに幸いになり…」の「幸い」と同じ言葉です。とすると、アブラムはエジプトに入る前から、妻サライがファラオの宮廷に召し入れられることにもなれば、何か物がもらえるぞ、と目論んでいたことになります。夫が「わたしの妹だ、と言ってください。そうすれば、わたしはあなたのゆえに幸いになり…」と頼むのを聞いたサライが、何を思ったかは分かりませんが、「ずいぶん卑しい男だ」と考えたかもしれません。いずれにせよ、アブラムの虚言がファラオに露見し、エジプトを去るように命じられ、ネゲブ地方に戻ることになります。しかし、ファラオから与えられた財産の返還は求められませんでした。

c 豊かさが暴きだした人間の現実（創世記13章1～13節）

続く13章は、アブラムが戻ったネゲブ地方での出来事を述べています。1～13節を読んでみましょう。

1 アブラムは、妻と共に、すべての持ち物を携え、エジプトを出て再びネゲブ地方へ上った。ロトも一緒であった。2 アブラムは非常に多くの家畜や金銀を持っていた。3 ネゲブ地方から更に、ベテルに向かって旅を続け、ベテルとアイとの間の、以前に天幕を張った所まで来た。4 そこは、彼が最初に祭壇を築いて、主の御名を呼んだ場所であった。5 アブラムと共に旅をしていたロトもまた、羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕を持っていた。

6 その土地は、彼らが一緒に住むには十分ではなかった。彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかったのである。7 アブラムの家畜を飼う者たちと、ロトの家畜を飼う者たちとの間に争いが起きた。そのころ、その地方にはカナン人もペリジ人も住んでいた。

8 アブラムはロトに言った。「わたしたちは親類どうしだ。わたしとあなたの間ではもちろん、お互いの羊飼いの間でも争うのはやめよう。

9 あなたの前には幾らでも土地があるのだから、ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう。」

エジプトを出てネゲブ地方に入ったアブラムの一行ですが、ここでも新たな課題に直面します。今回は飢饉という貧しさでしたが、今回は「彼らの財産が多すぎたから、一緒に住むことができなかった」とあるように、豊かさが引き起こしたもめごとでした。アブラムが提出した解決策は、「ここで別れようではないか。あなたが左に行くなら、わたしは右に行こう。あなたが右に行くなら、わたしは左に行こう」ということです。確かに争いはなくなりますが、その根本原因が除去されはしませんから、消極的な解決策と言わざるをえません。別れずに、共に生きる道こそ最上の解決でしょうが、安易な処理で取り繕いました。

ところで、もめごとを引き起こした原因は豊かさです。アブラムは「非常に多くの家畜や金銀」を持っていましたし、ロトもまた「羊や牛の群れを飼い、たくさんの天幕」を持っていたと書かれています。アブラムが豊かなのは、ファラオから与えられた財産が増えたからだ、と説明できますが、ロトが豊かになった理由には一言も触れていません。物語の書き手は関心のないことは書かないでしょうから、彼の興味はロトが財産を増やしたプロセスには向けられていません。多くの財産を手にした結果を書くだけで十分なのです。このことから分かるように、ネゲブに戻った後のもめごとの要点は、豊かさもまた困ったことを引き起こすという事実にあります。

エジプトでは貧しさが人間の卑しさをあぶりだし、ネゲブでは豊かさが人間の勝手さをあらわにしました。人間は貧しくても、また豊かでも、問題を引き起こすし、対処の仕方によっては、人間の卑しさや身勝手さ

をあからさまにしてしまいます。

こうして、アブラムとロトは別の道を歩むことになりますが、行き先選びの優先権はロトに与えられました。妻サライには卑劣になったアブラムですが、甥ロトには気前よさを見せたかったのかもしれない。ロトは遠慮せずに、その当時、主の園のように見渡すかぎりよく潤っていたヨルダン川の低地帯、つまり死海沿岸を選びました。アブラムに残されたのは広大ではあっても石だらけの地です。ロトの無遠慮さに落胆したにちがひありません。そのようなアブラムを神が慰めて、

14 ……「さあ、目を上げて、あなたがいる場所から東西南北を見渡しなさい。15 見えるかぎりの土地をすべて、わたしは永久にあなたとあなたの子孫に与える。16 あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう。17 さあ、この土地を縦横に歩き回るがよい。わたしはそれをあなたに与えるから。」

と述べています。神の言葉は「目を上げて」で始まっています。文字通りに取れば、アブラムは顔を下に向け、視線は下に向かっていたこととなります。そうであれば、アブラムは年寄りを大事にしないロトに不満を覚えたのです。神は「あなたの子孫を大地の砂粒のようにする。大地の砂粒が数えきれないように、あなたの子孫も数えきれないであろう」と約束しました。この先を読んでみましょう。

d 周囲との関係も問題をもたらず（創世記 14 章）

ロトが選んだ死海周辺には、ソドム、ゴモラ、アドマ、ツェボイム、ツォアルという町がありました。しかし、この地方を支配していたのは、チグリス・ユーフラテス川をも支配していたエラムであり、ケドルラオメルという王でした。ところが、ソドムとかゴモラ、アドマなどの王様たちは、結束してケドルラオメルに対して反乱を起こしました。しかし、征伐にやってきたケドルラオメルに打ち負かされてしまい、ソドムに住んでいたロトもつかまえられて、連れ去られてしまいました。この知らせを伝え聞いたアブラムの行動が 13 節以下に書かれています。

13 逃げ延びた一人の男がヘブライ人アブラムのもとに来て、そのことを知らせた。アブラムは当時、アモリ人マムレの檜の木の傍らに住んでいた。マムレはエシュコルとアネルの兄弟で、彼らはアブラムと同盟を結んでいた。14 アブラムは、親族の者が捕虜になったと聞いて、彼の家で生まれた奴隷で、訓練を受けた者三百十八人を召集し、ダンまで追跡した。15 夜、彼と僕たちは分かれて敵を襲い、ダマスコの北のホバまで追跡した。16 アブラムはすべての財産を取り返し、親族のロトとその財産、女たちやそのほかの人々も取り戻した。

大国エラムの軍隊に手勢三百十八人で立ち向かったのですから、大変な勇気です。ともかく、アブラムは大勝利をおさめ、捕虜とされた人や財産を取り返します。凱旋するアブラムを、ソドムの王とサレムの王メルキゼデクが迎えたことを述べて 14 章は閉じられます。こうして、アブラム物語の最初の頂点となる 15 章に入ります。

e 主において自分を確かにしたアブラム（創世記 15 章 1～6 節）

15 章は「これらのことの後で」で始まっています。「これらのこと」とは、今まで述べてきた 12 章から 14 章までを指しています。早速、15 章 1 節から 3 節までを読みます。

1 これらのことの後で、主の言葉が幻の中でアブラムに臨んだ。

「恐れるな、アブラムよ。

わたしはあなたの盾である。

あなたの受ける報いは非常に大きいであろう。」

2 アブラムは尋ねた。「わが神、主よ。わたしに何をくださるというのですか。わたしには子供がありません。家を継ぐのはダマスコのエリエゼルです。」 3 アブラムは言葉をついだ。「御覧のとおり、あなたはわたしに子孫を与えてくださいませんでしたから、家の僕が跡を継ぐことになっています。」

神がアブラムに「恐れるな」と呼びかけたのは、彼はケドルラオメルからの報復を恐れている、と見たからでしょう。大国エラムの王ケドル

ラオメルは面子をつぶされたのだから、報復を果たそうと考えるのは当然です。そこで、「恐れるな」と述べて、「わたしはあなたの盾である」と続け、必ず守ると約束したのですが、さらに「あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」と加えました。

しかし、アブラムは神が「あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」と語るのを耳にするや否や、日ごろ鬱積していた不満が堰を切ったようにあふれ出てきました。12章でハランを出た時から、子供に恵まれるのはいつかと胸を膨らませていたはずですが、15章に至るまで、少なくとも数年は経過しているはずなのに、子供に恵まれる兆候はまったくありません。この間、神の約束に信頼を置こうという思いと、子供に恵まれぬまま終わるのではないかという不安との狭間を揺れていたに違いありません。そんなときに、「あなたの受ける報いは非常に大きいであろう」と聞かされたのですから、「子供も与えられないのに、受ける報いは非常に大きい」などとよく言えたものだと、いら立ちをあらわにしたのでしょう。

2節のアブラムの言葉と、3節のアブラムの言葉は、内容的にはまったく同じです。どちらも、子孫を与えてくれないから、家を継ぐのは自分の子供ではなくて、ダマスコのエリエゼル、家の僕だ、と述べています。3節の冒頭に「アブラムは言葉をついだ」とありますが、ひとたび不満が爆発すると、抑えようがなくて、繰り返しになったのです。アブラムの抗議に対する神の応答が4～5節にあります。

4 見よ、主の言葉があった。

「その者があなたの跡を継ぐのではなく、あなたから生まれる者が跡を継ぐ。」

5 主は彼を外に連れ出して言われた。「天を仰いで、星を数えることができるなら、数えてみるがよい。」そして言われた。「あなたの子孫はこのようになる。」

アブラムから子供が生まれるとの約束は、すでに何度も繰り返されてきました。ですから、4節の神の言葉に新しい要素は見出せません。また、生まれる子孫の多数さを天の星にたとえたのは初出ですが、大地の

砂粒にたとえる例は、ロトと別れたときの神の言葉にすでに見られます。大地の砂粒も、天の星も、数えられないほどの多数さを表す比喻ですから、同じ内容だと言えます。つまり、5節の神の言葉にも新しさはありません。しかし、神の言葉へのアブラムの応答は

6 アブラムは主を信じた。主はそれを彼の義と認められた。

でした。2～3節のアブラムの抗議から考えると、神の約束に対してなにがしかの疑いを持っているでしょう。しかし、神からの新たな保証を与えられていないのに、アブラムは主を信じています。「信じる」とはいったいどのようなことでしょうか。まず、「信じる」と訳されたヘブライ語から考えてみましょう。

「信じる」と訳されたヘブライ語は、動詞アーマンのヒフィル形と呼ばれる動詞形です。動詞アーマンは「確かである」を意味し、ヒフィル形にされると、使役的な意味合いに変わりますから、「自分を確かにさせる」の意味だと言えます。ヒフィル形では、「べ」という前置詞と一緒に使われ、「…によって自分を確かにさせる」の意味になります。ですから、6節の「主を信じた」を直訳すれば、「主によって自分を確かにさせた」となります。ですから、前置詞「べ」の後におかれる名詞によって、その人が自分を確かにさせる手段が表されます。財力こそ自分を確かにさせる手段だと考えるなら、「彼は財力によって自分を確かにさせた」のであり、「彼は財力を信じた」ということになります。自分を確かにさせる手段は人によってさまざまでしょうが、アブラムが選んだ手段は主なる神だったのです。アブラムは神の約束に疑問をもつこともありましたが、やはり自分を確かにさせるのは神をおいて他にない、と決断したのです。

アブラムは神から「私が示す地に行きなさい」と指示されて、神を導き手とする生き方に入りました。確かに飢饉を逃れるためにエジプトに入った時には、自分の卑しさをあらわにしてしまい、またネゲブに戻って、豊かになったとき、ロトと共生できなくなりました。それだけでなく、周辺諸国のいざこぎに巻き込まれるもしました。アブラムのこの歩みが示しているように、人が生きるかぎり、常に何らかの課題に直面します。貧しいときは貧しいときなりに、豊かなときは豊かなときなりに問

題にぶつかるのですから、「自分を確かにさせる」手段を持たなければ、不安定な人生になってしまいます。

自分を確かにさせるその手段は人によって違います。財力を選ぶ人もあれば、社会的評価を選ぶ人もあれば、アブラムのように主なる神を選ぶ人もあります。何を選ぶかはその人の選択です。しかし、何を選ぶにせよ、確実な保障はどこにもありません。確実な保障がないから、選んだ手段が自分を幸いにすると信じたのであり、それを人は信仰と呼びます。つまり、財力が自分を確かにする手段と見て、それを選ぶなら、財力を信仰した人ということです。人間は何かを信仰して生きているのであり、何を信仰するかが、課題なのです。ベネディクト 16 世が神学教授としてドイツで教えておられたころ、『キリスト教入門』という本を書かれています。その中で「信仰とは冒険、賭けである」と言われていたと思います。

信仰は選びですから、不安が伴うことがあります。不安がない信仰はないと言えるかもしれません。もちろん不安がないほうがよいでしょうが、アブラムが神に抗議したように、不安が生じることがあってもおかしくはないのです。

II 「疑う」ということ（種類の違う二つの疑い）

そこで、2 番目の問題に入っていきたいのですが、「『疑う』ということ」です。新約聖書の中に、「疑う」と訳されている言葉が二つあります。日本語では同じように「疑う」と訳されるので、どちらが使われているかは、日本語訳では分かりませんが、実は二つの「疑う」があります。これからお話しする「疑う」は、ギリシア語ではディスタゾーです。この動詞は二度しか使われていませんが、二つの用例を読みたいと思います。まずは、マタイ福音書 28 章 16～20 節です。

a しかし、疑う者もいた（マタイ 28 章 16～20 節）

イエスは生前、弟子たちに「わたしは復活した後、あなたがたより先にガリラヤに行く」と言い残していますが、復活後、この言葉通りに、ガリラヤで弟子たちに会っています。この箇所はその場面を描いており、

この箇所でもタイ福音書は終わっています。

16 さて、十一人の弟子たちはガリラヤに行き、イエスが指示しておかれた山に登った。17 そして、イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた。18 イエスは、近寄って来て言われた。「わたしは天と地の一切の権能を授かっている。19 だから、あなたがたは行って、すべての民をわたしの弟子にしなさい。彼らに父と子と聖霊の名によって洗礼を授け、20 あなたがたに命じておいたことをすべて守るように教えなさい。わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる。」

18～20 節にイエスの言葉があります。この言葉がタイ福音書を閉じる言葉になります。逐語訳を作ってみました。

与えられた 私に 一切の権威が 天において また 地において。
 それゆえ 出て行って
あなたがたは弟子としなさい すべての民を
洗礼を授けて 彼らに 父と子と聖霊の名の中に
教えて 彼らに あなたがたに命じたすべてを守ることを。
 そして見よ 私は あなた方と共に いる すべての日々 世の終わりまで。

逐語訳の一行目と六行目は直説法の文章ですが、二行目から五行目はひとつながりの文章であり、主動詞は二重線を付けた「あなたがたは弟子としなさい」であり、傍線を付けた「出て行って」と「洗礼を授けて」と「教えて」は分詞形であって、主語である「あなたがた」がすべての民をイエスの弟子とするために必要な行為を示しています。すべての民が対象ですから、さまざまな国へ「出て行く」必要があるし、「洗礼を施し」、守るべきことを「教える」ことも必要です。しかし、この宣教命令に従事する弟子たちが忘れてはならない事実は、「天において、また地において、一切の権威がイエスに与えられている」ということであり、「世の終わりまで、すべての日に、イエスが共にいる」ということです。これが、復活したイエスがガリラヤで十一人の弟子たちに与えた指示なの

です。

しかし、この宣教命令の直前に、不思議なことが書かれています。17節に、十一人の弟子たちは「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」とあるのに、イエスは疑う者の存在に気づかなかったかのように、弟子たちに近づいて、宣教を指示しています。イエスは人の心を見抜く能力をしばしば示しているのに、ここではそれが働かなかったのでしょうか。しかし、宣教命令という重大な指示を与えるときに、注意散漫であるはずがないとすれば、気づいていたはずですが、また、弟子たちは「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」のですから、疑った弟子たちも、ひれ伏した一人でしょう。とすれば、信仰が皆無だったのではありません。信仰はありましたが、疑いも残っていたのです。イエスにとって、宣教者とは微塵も疑いをもたない完全な信仰者だけではありません。なにがしかの疑いが残っていても、かまわないのです。なぜなら、宣教は他人に宣教するだけでなく、自分自身にも宣教しているからです。宣教活動を通じて、疑いが解消してゆくからです。

17節で「疑う者」と訳されたのは、ディスタゾーという動詞の分詞形です。この動詞が表す疑いは、信仰の全面的な否定ではなく、信仰があるけれども、まだ残っている疑いを表します。この意味合いがはっきりと示されている、もう一つの箇所を読むことにします。

b なぜ疑ったのか

(マタイ 14 章 22～33 節と、その並行箇所マルコ 6 章 45～52 節)

ディスタゾーが使われる、もう一つの聖書箇所は、マタイ福音書 14 章 22～33 節です。この箇所の意味を知るために、マルコにおける並行箇所であるマルコ 6 章 45～52 節と比較してみようと思います。まずマルコです。

45 それからすぐ、イエスは弟子たちを強いて舟に寄せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間に御自分は群衆を解散させられた。46 群衆と別れてから、祈るために山へ行かれた。47 夕方になると、舟は湖の真ん中に出ていたが、イエスだけは陸地におられた。48 ところが、逆風のために弟子たちが漕ぎ悩んでいるのを見て、夜が明けるこ

ろ、湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとされた。49 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。50 皆はイエスを見ておびえたのである。しかし、イエスはすぐ彼らと話し始めて、「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない」と言われた。

次に、マタイです。

23 群衆を解散させてから、祈るためにひとり山にお登りになった。夕方になっても、ただひとりそこにおられた。24 ところが、舟は既に陸から何スタディオンか離れており、逆風のために波に悩まされていた。25 夜が明けるところ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。26 弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。27 イエスはすぐ彼らに話しかけられた。「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」

ここまではほぼ同じなのですが、よく読むと無視できない違いがあるのがわかります。マルコの48節の途中から見ると、

夜が明けるところ、湖の上を歩いて弟子たちのところに行き、そばを通り過ぎようとされた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。

とあります。しかし、マタイではこの部分は

夜が明けるところ、イエスは湖の上を歩いて弟子たちのところに行かれた。弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、「幽霊だ」と言っておびえ、恐怖のあまり叫び声をあげた。

マタイでは、マルコの傍線部、「そばを通り過ぎようとされた」という表現がカットされています。この「そばを通り過ぎようとされた」は、奇妙な表現です。イエスは漕ぎ悩んでいるのを見て、湖の上を歩いて弟

子たちのところに近づいて行きました。ですから、イエスは助けようとして、湖上を歩いて近づいたはずなのに、イエスは「通り過ぎようと考えた」からです。

なぜマルコは「通り過ぎる」を使ったのでしょうか。それを解くヒントが出エジプト記34章にあります。シナイ契約について書いた箇所です。その4節以下を読んでみましょう。

4 モーセは前と同じ石の板を二枚切り、朝早く起きて、主が命じられたとおりシナイ山に登った。手には二枚の石の板を携えていた。5 主は雲のうちにあって降り、モーセと共にそこに立ち、主の御名を宣言された。6 主は彼の前を通り過ぎて宣言された。「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち、7 幾千代にも及ぶ慈しみを守り、罪と背きと過ちを赦す。……」

モーセは「前と同じ石の板を二枚切り、……二枚の石の板を携えていた」とありますが、砕かれてしまった最初の石の板の替わりです。というのは、シナイの麓でモーセの下山を待っていた民は待ちきれなくなって、モーセに替わる導き手として金の子牛を造り、それを礼拝し始めました。モーセは下山して、それを目にして激しく怒って、砕きましたが、民が金の子牛を悔いたので、戒めの再授与が行われることになり、モーセは前と同じ石の板を切って、シナイに登りました。

そのとき、神が顕現しますが、それを「(彼の前を) 通り過ぎて」と表現しています。出エジプト記34章を書いた人は、「モーセの前を通って、先に行く」の意味で使っているでしょうが、6節の「主、主、憐れみ深く恵みに富む神、忍耐強く、慈しみとまことに満ち……」はイスラエルの神の本質を開示しています。ですから、歴史が進むとともに、この場面の重要性がいっそう認識されるようになり、ここでの「通り過ぎる」は普通の意味を超え、神が「顕現する」といったニュアンスと結びつく言葉になっていったと思われます。マルコは湖上を歩くイエスにイスラエルの神を見えています。ですから、51～53節には

51 イエスが舟に乗り込まれると、風は静まり、弟子たちは心の中で非

常に驚いた。52 パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである。53 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。

とあります。この物語の直前に、五千人にパンを与える奇跡が書かれています。このパンの出来事を理解していたならば、心が鈍くならず、非常に驚くことはなかったのですが、パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたので、非常に驚いてしまった、とマルコは説明しています。マルコは弟子の無理解をとて強調しています。しかし、マタイの結びと比べてみましょう。マタイ 14 章 32～34 節です。

32 そして、二人が舟に乗り込むと、風は静まった。33 舟の中にいた人たちは、「本当に、あなたは神の子です」と言ってイエスを拝んだ。34 こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いた。

舟の中にいた弟子たちは「イエスを拝んだ」とあるので、マルコとは違って、マタイでの弟子たちはイエスを理解できる人たちです。マルコにとっては神の顕現を表す出来事です。シナイでモーセに現れた出来事に合わせて、「通り過ぎる」を用いました。しかし、マタイがこのキーワードを削除したのは、この出来事の要点は神の顕現ではなく、別のことだと見ているからでしょう。それを端的に示すのは、マタイの 28～31 節であり、そこにはペトロとイエスの対話を書かれており、マルコにはこの対話がまったくないことです。

28 すると、ペトロが答えた。「主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください。」29 イエスが「来なさい」と言われたので、ペトロは舟から降りて水の上を歩き、イエスの方へ進んだ。30 しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたので、「主よ、助けてください」と叫んだ。31 イエスはすぐに手を伸ばして捕まえ、「信仰の薄い者よ、なぜ疑ったのか」と言われた。

31 節で傍線をつけた「疑った」は、28 章 17 節の「疑う者」と訳され

たディスタゾーです。この語ディスタゾーは、副詞ディスと動詞ヒステーミによる合成動詞です。〈ディス〉は「二度・二度目」を表します。例えば、マルコ 14 章 30 節に、「はっきり言っておくが、あなたは、今日、今夜、鶏が二度鳴く前に、三度わたしのことを知らないと言うだろう」とありますが、ここで「二度」と訳された語がディスです。動詞ヒステーミは「立たせる・立つ」の意味でよく使われる動詞ですから、ディスタゾーの基本的な意味は「思いが二つに分かれる」だと思われます。現に、この動詞は新約聖書以外の教会文書での用例を見ると、「不確かである」とか「あることに関して二つの思いを持つ」といった意味で使われ、ここでは「心の思いが二つに分かれ、動揺する」の意味だと思われます。

マタイの 28 節以下に戻ると、たしかにペトロの心は二つに分かれています。一つは、28 節に「すると、ペトロが答えた。『主よ、あなたでしたら、わたしに命令して、水の上を歩いてそちらに行かせてください』とあるように、尊敬する師が水の上にいるなら、私も先生のようにありたいと考え、「水の上を歩いてそちらへ行かせてください」と願うペトロです。イエスが「来なさい」と言ったので、ペトロは舟から降りてイエスのほうへと水の上を進みました。ですから、ペトロの心に、先生のようにありたい、という思いがあるのは確かです。しかし、30 節を見ると「しかし、強い風に気がついて怖くなり、沈みかけた」と書かれています。師のようにありたいと思う心がある一方で、強い風に気づいて怖くなったペトロがいます。ですから、ペトロの心は、確かに二つに分かれて動揺しています。キリストのようにありたいと思う反面、現実を見ると、馬鹿な目にあうのではないかと不安になってしまいます。もう一度、マタイ 28 章 17 節の「イエスに会い、ひれ伏した。しかし、疑う者もいた」を思い出してください。十一人全員が疑ったのではないのでしょうか、疑った者がいたことは確実です。彼らは「ひれ伏す」と同時に、疑っていますから、心が二つに分かれています。アブラムも創世記 15 章で神に抗議したのは、子供が生まれるという神の約束を信じ切れなくなったからでしょう。

人間はだれでも神に疑いを抱いてしまうことがあるのではないのでしょうか。しかし、その時でも、信仰がまったくなくならずに、信仰と疑いが同居している状態をこの動詞は表すのだと思います。そのようなとき、

我々はどうにすべきなのでしょう。

まず、マタイ 14 章でペトロはどのようにしたかを見ることにしましょう。強い風に気がついて怖くなり、沈みかけたとき、ペトロは「主よ、助けてください」と叫びました。すると、イエスは「すぐに手を伸ばして捕まえ」ています。確かに「信仰の薄い者よ。なぜ疑ったのか」と叱られてしまいますが、32 節を見ると、「二人が舟に乗り込むと、風は静まった。舟の中にいた人たちは、『本当に、あなたは神の子です』と言ってイエスを拜んだ」とあります。ペトロが舟の外に足を踏み出さなければ、マルコが書く弟子たちと同じように、「心の中で非常に驚いた。パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである」という結果に終わったかもしれません。「主よ、助けてください」と叫ぶことを知っているなら、弟子には失敗がないと言えます。失敗があるとすれば、舟の外に足を踏み出す勇気を欠いているときです。

次にマタイの 28 章を見ましょう。疑う者もいる、と気づいていたはずのイエスは、彼らの疑いを無視して宣教命令を出していました。宣教命令の構文に注意すると、「わたし」について語った直説法の言葉、つまり「天と地の一切の権能がわたしに与えられている」と、「わたしは世の終わりまで、いつもあなたがたと共にいる」という言葉で囲い込まれています。だから、「天と地の一切の権能が与えられている」イエスが、「世の終わりまでいつも共にいる」ということを、常に心に納めていれば、疑いは問題ないということです。ディスタゾー、つまり信仰の全否定ではなく、「心が二つに分かれて動揺している」という意味での疑いは問題ないということです。どれほどの時間が必要かは別にして、必ず解消される時が来ると思います。

今、「信仰の全否定でなければ」と申しました。新約聖書で「疑う」と訳される言葉はディスタゾーだけでなく、もう一つ別の動詞があります。ディアクリーノーという言葉です。この動詞は接頭辞ディアと動詞クリーノーによる合成動詞です。ディアは「すっかり・完全に」を意味し、クリーノーは「判断する」の意味で使われます。ディアクリーノーは能動態（動作作用の主体が主語となるとき動詞形）としては、①「区別する」、②「見分ける」の意味です。しかし、ギリシア語の動詞には中動態（動作主体の働きの結果が動作主体に戻るとき動詞形）という形もありま

す。ディアクリーノーがこの箇所のように中動態になると、次のような意味で使われます。

- ①「ある人から自分自身を離す」
- ②「反対する」
- ③「自分と合わないと判断する・疑う」

ヤコブ 1：6 いささかも疑わず、信仰をもって願いなさい。疑う者は、風に吹かれて揺れ動く海の波に似ています。

マルコ 11：23 はっきり言うておく。だれでもこの山に向かい、『立ち上がって、海に飛び込め』と言い、少しも疑わず、自分の言うとおりにになると信じるならば、そのとおりになる。

ローマ 4：20 彼は不信仰に陥って神の約束を疑うようなことはなく、むしろ信仰によって強められ、神を賛美しました。

「疑う」と訳される用例を三つあげておきました。ヤコブではディアクリーノーに「いささかも」が修飾し、またマルコでは「少しも」が修飾しています。また、ローマでは「信仰」の反対語とされています。このような用例から分かるように、ディアクリーノーは信仰の全否定を表します。信仰をまったく否定してしまうことは許容されませんが、「心が二つに分かれる」という疑いであれば、許容されるということだと思えます。

III キリスト者が「その中で自分を確かにしようとする」神とはどのような神か

a イザヤ 44 章 21～22 節

最後に、キリスト者がその中で「自分を確かにさせる (=信じる)」神とは、どのような神なのか、それを旧約と新約とから一つずつ取り上げてみます。旧約聖書からは、イザヤの 44 章 21～22 節を読みたいと思います。私が神学校に入った頃、「旧約聖書は怒りの神、新約聖書は愛の神」と言われる方がいました。しかし、神学校の講義で初めてイザヤ 44 章に出会って、「旧約聖書は怒りの神」と決めつけることはできないぞ、と思いました。そこで、ヘブライ語の勉強を始めました。ですから、私にはとって懐かしい箇所なのです。これも逐語的な訳で、しかも構

成が分かるような形で載せたいと思います。

21 思い起こしなさい このことを ヤコブよ そしてイスラエルよ
まことに 私の僕 あなたは。

私はあなたを形作った

僕 私にとって あなたは。

イスラエルよ ない あなたは私に忘れられる。

22 私は吹き払った 雲のように あなたの背きを
そして霧のように あなたの罪を。

立ち帰りなさい 私のもとに

まことに 私はあなたの親戚として振る舞った。

私は常に、聖書に自分の考えを言わずに、聖書が語るように聞くためにはどうしたらよいか、を考えています。そのためには、聖書本文を丁寧に読むより他に方法はないと思います。丁寧に読むための方法としてまず行うのは、聖書本文がどのような構成で書き上げられているか、徹底的に調べます。

この箇所の構成ですが、逐語訳で字下げによって示したように、五つの部分に分けることができます。まず21節の最初の二行と22節の最後の二行とが対応関係にあります。どちらも、命令文(「思い起こしなさい」と「立ち帰りなさい」)の後に、強調語「まことに」で始まる直説法が続いています。次に21節の三行目と22節の最初の二行が対応しています。どちらも、一人称の動詞(「私はあなたを形作った」と「私は吹き払った」)を用いて、神がイスラエルに行った行為を述べているからです。中央には「あなた」が「私にとって」どのような存在であるかが語られています。このような構成法を軸対応と呼びます。

21節の一行目に「このこと」とありますが、この指示代名詞は何を指しているのでしょうか。20節以前を読んでも、当てはまりそうな事柄がありません。ですから、これから述べる何かを指しているはずで、軸対応を用いていることを考えると、21節の三行目から22節の二行目までのことだと考えます。つまり、「私があなたを形作り、あなたの罪を吹き払ったのは、あなたは私の僕であり、あなたは私に忘れられることが

ないからだ」ということです。これを「思い起こす」なら、「私のもとに立ち帰るはずだ」と神は説いています。

もう一つのことに注目したいと思います。それは22節です。この節の後半部に「私のもとに立ち帰りなさい」とありますが、その前に「あなたの背き、あなたの罪を吹き払った」と述べています。もうすでに立ち帰っている者に向かって、立ち帰りなさいと言うはずがないですから、イスラエルはまだ立ち帰っていないはずです。立ち帰ってもいないのに、神は一方的に「あなたの背き、あなたの罪を吹き払った」と宣言しています。神は「お前と私の間に、お前にとって障害になるようなものは何一つない、帰って来い」と呼びかけているのです。このような神の中で、自分を確かにさせることが、聖書の信仰なのだろうと思います。

22節の最後の行で「親戚として振る舞った」と訳した動詞ガーアルは、普通は「あがなう」と訳されています。現代とは違って、家族とか一族の存在感が強かった時代ですから、親戚に対する義務が大事にされました。この言葉は古代イスラエルで親戚が背負う義務を行うことを意味します。身内の義務は次のようなものでした。

- ①身内の誰かが無残に殺害された場合、その殺害者を身内が殺すことができました。例えば、民数記35章19節に「血の復讐をする者は、自分でその殺害者を殺すことができる。彼と出会うとき、自分で殺すことができる」とありますが、傍線部の「血の復讐をする者」の「血」は殺害された身内が流した血を表し、「復讐する者」と訳された言葉は動詞ガーアル（親戚として振る舞う）の分詞形です。
- ②子供がなく夫と死別した女性は夫の身内の男性と結婚する権利が認められていました。ルツ記2章20節に「ナオミはさらに続けた『その人はわたしたちと縁続きの人です。わたしたちの家を絶やさないようにする責任のある人の一人です』」とありますが、傍線部の「責任のある人」がガーアルの分詞形です。
- ③身内が土地を売り払おうとしているときには、その身内には買い取る責任がありました。ルツ記4章4節に「『それでわたしの考えをお耳に入れたいと思ったのです。もしあなたに責任を果たすおつもりがあるのでしたら、この裁きの座にいる人々と民の長老た

ちの前で買い取ってください。もし責任を果たせないのでしたら、わたしにそう言ってください。それならわたしが考えます。責任を負っている人はあなたのほかになく、わたしはその次の者ですから。』『それではわたしがその責任を果たしましょう』と彼が言う」とありますが、傍線部はすべてガーアルです。

第二イザヤ（イザヤ書 40～55 章の著者）は、神が「親戚として振る舞う（＝ガーアル）」と述べていますが、神は人間に無関心ではいられない、と見ているからでしょう。ちなみに、「あがなう」を意味する言葉は他にもあります。それは「対価を支払って、所有権を手にする（パーダー）」の意味であり、神がエジプトからイスラエルの民を脱出させたことを表す言葉として多く使われます。

b コリントの信徒への手紙Ⅱ 5章 14～21 節

もう一つの箇所は新約聖書から選びました。私たちが「自分を確かにさせる」ために、関わるべき神はどのような神なのか、それを考えたいと思います。コリントの信徒への手紙のⅡの5章 16～21 節です。

16 それで、わたしたちは、今後だれをも肉に従って知ろうとはしません。肉に従ってキリストを知っていたとしても、今はもうそのように知ろうとはしません。17 だから、キリストと結ばれる人はだれでも、新しく創造された者なのです。古いものは過ぎ去り、新しいものが生じた。

18 これらはすべて神から出ることであって、神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ、また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました。19 つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです。20 ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています。キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい。21 罪と何のかかわりもない方を、神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです。

16 節に「肉に従って」が二度使われています。日本語の「肉」と聖書が述べる「肉」とは完全には重なっていませんから、ずれがあります。日本語も聖書も「動物の皮膚におおわれ、内部で骨格を包む柔軟質のもの」を肉と呼ぶのは確かです。しかし、日本語ではさらに「衣服などをつけない裸の肉体や、性欲の対象としての肉体」というように罪とつながるイメージがあります。しかし、聖書の「肉」にはそのような意味合いがほとんどないと言えます。聖書では、神との関わりを欠いているがゆえに、はかなく弱い人間を「肉」と呼びます。自然のままの、ただの人間、といった意味です。今、読んだ箇所での「肉」はその意味です。

17 節に「新しく創造された者」という表現が使われていますが、これは「新しい創造」と訳すことも可能であり、「肉」というあり方の正反対を指しています。17 節を逐語的に訳してみます。

それで もし 誰かが キリストの中に
新しい クティシスが

一行目には動詞「ある」を補うべきですから、「それで、もし誰かがキリストの中にあれば、新しいクティシスが」の意味になります。クティシスは二つの意味で使われ、一つは「創造という行為」であり、もうひとつは「創造の結果としての被造物」です。新共同訳は後者の意味にとりました。しかし、前者の意味も可能だと思えます。「キリストの中に」という前置詞句はパウロが好んで使う言葉で、キリストとの深い関わりを表します。

神が新しいクティシスを起し、私たちは新しいクティシスになっているのだから、「肉」というあり方、つまり自然のままの人間として行動することはもはやありえない、とパウロは説いています。「古いもの」とは「肉」というあり方を指し、「新しいもの」とは「新しいクティシス」としての生き方を指します。

18 節になると、「神は、キリストを通してわたしたちを御自分と和解させ」というように、「和解」という言葉を使っています。神と人間との関係は、和解を必要とするような対立関係の中にあっただけども、神が人間に和解を申し出たというのです。人間同士の場合では、悪いことをし

た者が和解を願い出るのが普通ですが、神と人間の間では、神が和解を申し出ました。罪を犯して神から背いている人間が自力で神と和解することはできないからです。神からの決定的な介入がないかぎり、神との和解は不可能なのです。決定的な介入はキリストの出来事として起されますから、その出来事を宣べ伝える人が必要になり、「また、和解のために奉仕する任務をわたしたちにお授けになりました」と続けています。

イザヤ 44 章でも、立ち帰ってもいないイスラエルの罪を神が一方的に吹き払っていました。人間が自力で神と和解することはできないから、神からの決定的な介入が必要だという考え方は旧約聖書にすでにある考え方です。

19 節に「つまり、神はキリストによって世を御自分と和解させ、人々の罪の責任を問うことなく、和解の言葉をわたしたちにゆだねられたのです」とありますが、ここでの「和解の言葉」とは、十字架上のイエス・キリストを指していると思われます。イエス・キリストは、神がわれわれに語りかけた和解の言葉であり、その和解の言葉を宣べ伝える任務を担う者が必要になります。

20 節では「ですから、神がわたしたちを通して勧めておられるので、わたしたちはキリストの使者の務めを果たしています」と述べた後に、「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」と書いています。パウロは、神と和解させていただきなさい、と私たちに呼びかけていますが、そのパウロの背後には、和解の言葉であるキリストがいて、さらにその背後には、世と和解しようとした神がいるのですから、パウロの背後のキリスト、キリストの背後の神、その三者が一つになって、神と和解させていただきなさい、と呼びかけているということです。

21 節では、「罪と何のかかわりもない方」、つまりイエス・キリストを「神はわたしたちのために罪となさいました。わたしたちはその方によって神の義を得ることができたのです」と述べていますから、パウロは、神の前に正しいものとされる道は、自分の努力ではなく、この和解の言葉を受け入れることにある、と主張しているのだと思います。

和解は神から始まり、そこで主要な働きをするのも神だと言えます。イザヤ 44 章にしても、あるいはコリントの信徒への手紙Ⅱの 5 章にして

も、神の側のはたらきかけを受け取ることが、人間が新たにされ、正しい者とされる唯一の道だ、と述べています。しかし、20 節に「キリストに代わってお願いします。神と和解させていただきなさい」とあるように、人間の側の積極的な参与も必要です。神が差し出した和解を積極的に取り入れるとき、神の業は効果を発揮するのだと思います。

アブラムが貧しいときにも、また豊かなときにも、問題を抱えたように、私たちが常に解決すべき課題に直面しています。ですから、私たちにとって緊急の課題は「何において自分を確かにさせるか」という問に答えることです。しかし、弟子たちがそうであったように、私たちの心も二つに分かれてしまい、疑いを持つこともしばしばです。聖書が認めない疑いは信仰の全否定につながるような疑いです。そうでない疑いであれば、許容されています。神の愛を信じ切れない私たちはたしかに罪びとですが、このような私たちに神は「私のもとに立ち帰りなさい」と呼びかけ、さらにイエスを遣わして無償の赦しを与え、「和解」を成し遂げました。

(付記：本稿は 2013 年 7 月 13 日に行われた藤女子大学キリスト教文化研究所主催の公開講演を文章化したものです。)